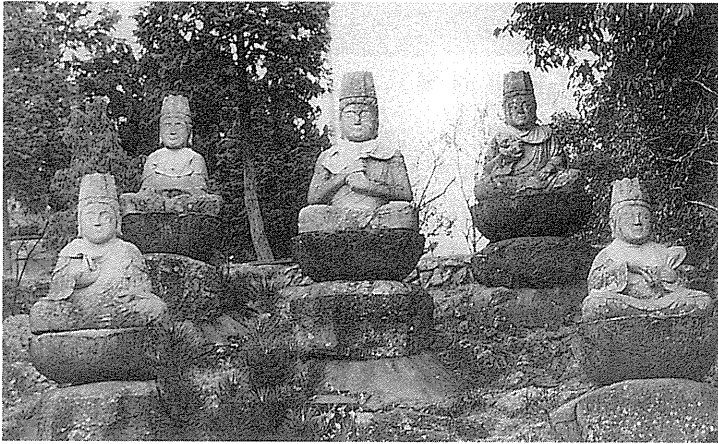




『朝日山周辺』をたずねて



五智如来石仏

朝日山 JR網干駅東北方の標高88mの山、山頂に大日寺がある。

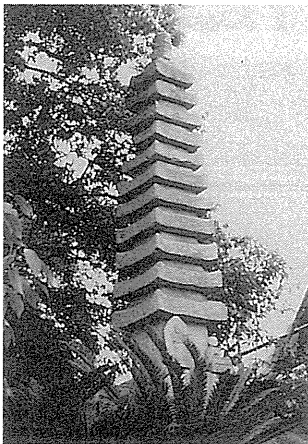
五智如来石仏 朝日山大日寺の境内にある。赤松政秀（龍野城主）の寄進と伝える。中央は大日如来、向って右上阿閃、右下宝生、左下阿弥陀、左上不空成就の五如来。

十三重石塔 五智仏の東側に古い石塔がある。十一段しかないが、途中二段を失っており、もとは十三重であった。室町時代のもと思われる。

聖天堂 聖天（歓喜天）を祭る。もとは災いの神であったが、仏の教化で仏教の守護神となった。

朝日山の合戦 天文～元龜にかけて朝日山周辺で三度の戦いがあり、その戦火を受け大日寺は全焼した。

- ① 天文元年（1532）6月鶴の斑鳩寺と大日寺の争い、双方死者130名。
② 天文3年（1534）
③ 元龜元年（1570） } 共に龍野城主と太田城主の争い。



大日寺・十三重石塔

朝日山大日寺の伝説

『播磨鑑』に次のような話がある。

お寺を開いたのは法道仙人というインドから来た坊さんで、本尊も一緒に持って来たものだという。この仏像は始め家島の堂崎に安置してあった。仙人は空鉢を海上に飛ばして、往来の船に供米を乞われていた。ある時、一人のいたずら者が、この鉢にいわしを投げ入れたところ、鉢の底が抜け、

いわしは海中に落ち、鉢の底は元通りとなった。そしていたずらをした者の船は波間に沈んでしまった。その時より観音様は朝日山に移られ、今の本尊になったという。鉢は網干の沖の浜へ流れつき、現在大覚寺に伝わっている鉄鉢がそれだという。

大日寺には、昔30坊余りの房舎が建ち並んでいた程の大伽藍で、鎌倉時代には心寂上人という智識のある坊さんが居られた。しかし、天文年中（1532～55）に火災に会い、お堂も宝物も縁起もことごとく焼けてしまった。本尊も危なくなったが、その時の坊さんが、ふだんでは2・3人がかりでも動かぬ仏像を軽々と背負って運び出したという。

心寂上人は『峰相記』によると、法然上人の弟子、信寂上人のことで、招かれ東の麓に堂を作り、坊舎を建て一時播磨における浄土信仰の中心になったことが記されている。



本尊（千手観音像）

『播磨国風土記』 奈良時代の書物に、この辺りの次の地名にまつわる話が記してある。

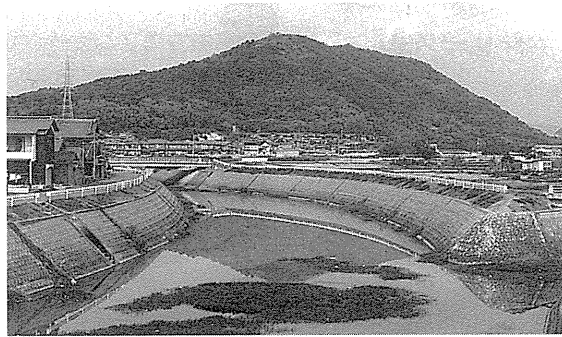
大家里 旧名大宮里（下太田を除く勝原区一帯とも朝日山西南方一帯ともいう）応神天皇が宮を作られたので大宮という。

大田里（下太田から太子町上太田一帯）昔呉勝が韓国から渡って来て紀伊国名草郡大田村に住み、後分れて摂津国三嶋賀美郡大田村に移り、更に揖保郡大田へ来た。もとの紀伊国大田の名をとって大田里という。

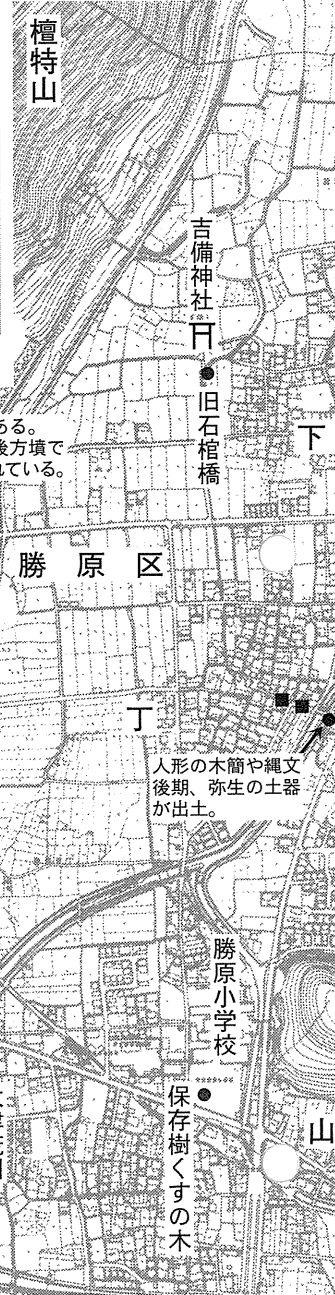
大法山 今名勝部岡（朝日山のこと）^{すぐりべのおか} 応神天皇がこの山で重要な法令を出されたので大法山という。勝部^{おおのりやま}というのは（推古又は齊明天皇）の時、大倭千代勝部をつかわして田をひらかせたのでこう呼ぶ。

大見山（檀特山のこと）^{だんとくさん} 応神天皇がこの山に登り四方を望まれたので大見山という。立った所に大きな岩があり、これをくつと杖のあとだという。

以上のほかに 与富等（丁村のこと）魚戸津・笹岡・村田（これらは場所不明）などの地名がでている。

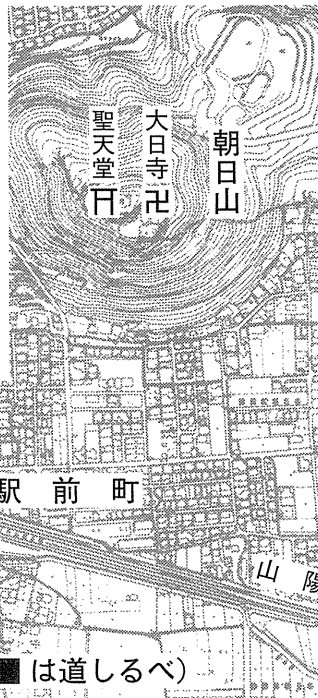


檀特山遠望



檀特山古墳群
10基の古墳がある。
1号墳は前方後方墳でないかとみられている。

人形の木簡や縄文後期、弥生の土器が出土。



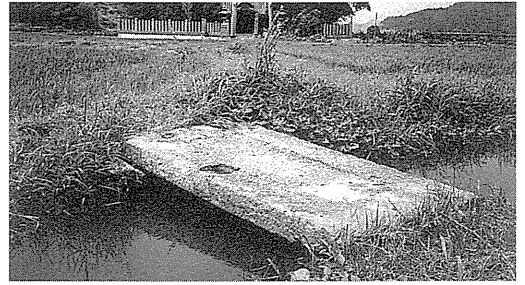
朝日谷の火揚げ 朝日谷地区の年中行事の一つに8月15日の夜おこなわれる火揚げがある。魚吹八幡神社の記録によれば、明応年間の大干ばつの時、愛宕大権現に火揚げをして、降雨を祈った。そのお陰で救われた村人達は、神にささげるため毎年火揚げを行うようになったという。かつては20mに近い竿に籠をつけて火揚げを行った。現在は、やや簡素化されているが、火揚げの行事はここと網干の垣内に伝わる。高い柱の先にワラを一杯つめたジョウゴ型の竹かごをゆわえて立て、たいまつを投げ上げて火をつける。この柱をたてるのが非常な作業で多くの人が数時間かけて立てる。津市場の稲荷神社に火揚げ図絵馬があり、各地で行われていた様子がわかる資料である。



火揚げ (増田重信氏撮影)



吉備神社の絵馬と拍犬 お伊勢まいりを記念し、数多くの絵馬や写真がある。明治42年13名が各自の旅姿を写したものが珍しい。拍犬は天保3年(1832)のもの。この社は吉備武彦命を祭る古社という。



旧石棺橋

旧石棺橋 吉備神社の南方、用水路の橋に転用されていた石棺の蓋石は現在、吉備神社境内に移設。97cm×176cm 厚さ12cm
 下太田廃寺 白鳳時代の寺跡、塔跡は県史跡に指定、次頁参照
 丁古墳群 もとは下図のように谷間の奥や山頂部に約100基の古墳があり、市内最大の古墳群であった。戦後、宅地造成のため大部分が消滅した。昭和36年から40年にかけて発掘調査され、調査報告書『姫路丁古墳群』が出版されている。



丁古墳分布略図(1958年加藤氏調査)



ひさご塚

丁古墳公園 丁古墳群のうち、山裾にあった5基をそのまま保存し、住宅地の一角に古墳公園がつけられている。後期の横穴古墳のようすが良くわかる。

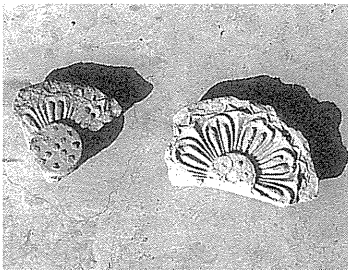
ひさご塚(瓢塚) 丁古墳群最大の前方後円墳、墳丘全長は104mと考えられ、前方部に比して後円部が極めて低い。盗掘により後円部に竪穴石室が表われている。もとは葦石でおおわれていたようである。「ちょうし塚」とも呼ばれ市内第二位の大きさ。前方部のかたち(撥形)や採集土師器から最古式の古墳と思われる。国の史跡地に指定。



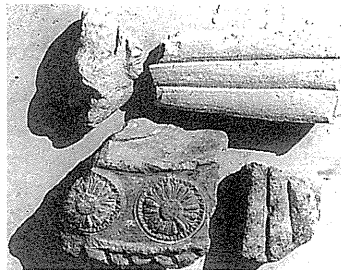
下太田廃寺全景

下太田廃寺塔跡 南北約8m、東西約7.5m、高さ70cmの土壇があり、心礎を中心に四天柱礎と北側および西側の側柱礎も旧位置にある。東と南の側柱礎は、旧位置へ復元されている。土壇の周りも補修されている。礎石の位置から1辺、長さ6.2m方三間高さ約35mの五重塔が建っていたと推定されている。塔跡は県指定史跡である。

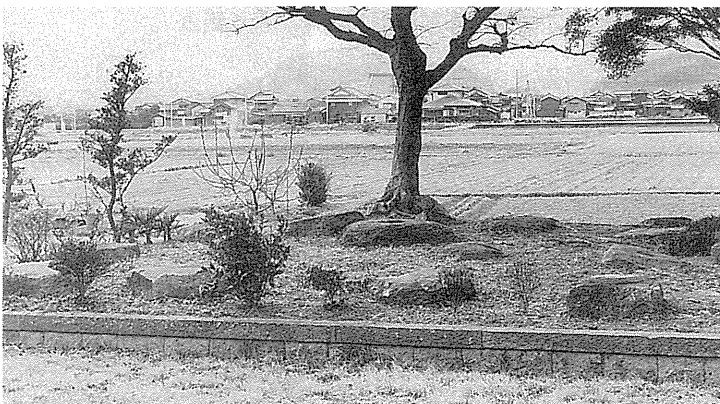
薬師堂 塔跡の北方に薬師堂がある。昭和10年代に改築されたもので、もてここにあった古い建物は、塔跡すぐ東に移され、黒岡大明神を祭る。この建物は棟札によると万延元年（1860）のものである。これらの堂のまわりには、付近から出土の礎石が集めてあり、造り出しのあるものも多く見られる。



軒丸瓦



鴟尾(しび)瓦の破片



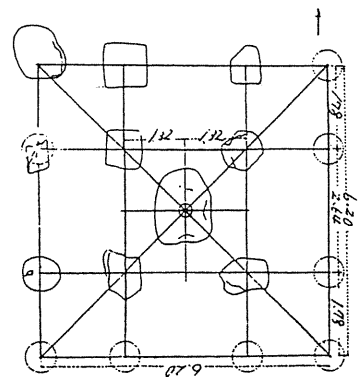
塔礎石

下太田廃寺 下太田東方の田の中にある。塔の土壇と礎石が残っており、古瓦も付近から多く出土する。塔心礎の形式や瓦の文様から白鳳時代の寺跡とみられる。塔跡以外の遺溝は不明であるが、字名や多くの礎石、土壇についての伝承などから講堂や食堂を配した方1町（109m）の大寺院があったと推定されている。



旧薬師堂 おがみ絵馬がかかっている。

古瓦 廃寺跡より出土する古瓦を下太田の大塚元治氏が、昭和初年より現在まで収集され、数十点を保存されている。下太田廃寺の歴史を知るのに貴重な資料である。



塔礎石実測図「播磨上代寺院址の研究」より中心は心礎、その周りが四天柱礎外側が側柱礎。この図は昭和初期に実測されたもので、現在礎石は、柱位置に復元されている。